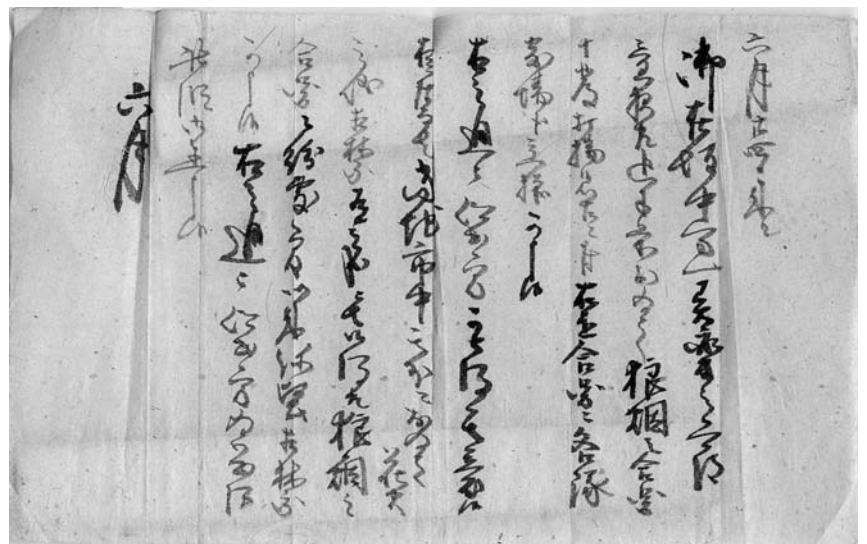


## 夏の風物詩花火

昭和50年代から段々と規模が拡大されてきた三田まつりの花火大会ですが、今年は約2300発もの打ち上げ花火が夜空を焦がし、市民の目を楽しませてくれました。花火はどちらかというと都市の娯楽ですので、市域に関する昔の花火の記録はなかなか見あたりませんが、高平地区には明治21(1888)年に花火の製造が企てられた記録が残されており、製造予定とされた「星下り」「スダレ柳」「ススキ」などの製品名から当時の風情をしのぶことができます。

神戸有馬電気鉄道（現神戸電鉄）開通翌々年の昭和5(1930)年7月には、有馬温泉で花火大会が催され、三田駅からも割引乗車券が発売された記録があります。それによると大会は昼の部の「懸賞付き打ち上げ花火」と、夜の部の三河（現愛知県で花火の名産地）の仕掛け花火の二部構成でした。一方、市内で保存されていた明治・大正頃の赤十字社兵庫県支部総会の「余興煙火」のプログラムも、やはり昼・夜の二部制です。現代的な感覚では昼の花火というのはあまり想像が付きませんが、このプログラムによると、昼の部の28発の花火には「雷鳴」や「煙登龍」など音や煙にちなんだ名前が多いのに対して、夜の部の12発には「五色星」や「紅光引」など、色を表した名前が多くみられます。つまりかつての昼の花火の主役は音と煙の造形を楽しむ「煙火」であり、夜の部は音と光による文字通りの「花火」だったようです。

旧九鬼家住宅資料館には、江戸時代の花火に関するめずらしいお触れが残されていました。それによると江戸幕府の将軍が大坂滞在中に何か異変が起こった際には、昼夜ともにのろしを合図に使うので、在坂中は近辺で紛らわしい花火の使用を禁ずるという内容です。旧暦6月に出されたこのお触れからは、阪神間でも夏の風物詩として花火が広がりつつあったことや、当時の花火がのろしと紛らわしい



のろしと紛らわしい花火を禁ずるお触れ

「煙火」であったという、何だかほほえましい様子をうかがうことができます。